蟲のいい人類

近代的な、近代歐羅巴的な、當世風な總ての物が、いよいよ益々私の心から遠くなつて行く。私に面白くないもの、氣に入らないもの、我慢のしにくいものになつて行く。

備忘錄のやうにして書きとめられた、これらの斷片的な表白の中にも、所謂新しい思想や新しい感情と云はれるやうなのは一つもあるまい。私は私自身の考へ方感じ方を、寧ろ餘りにも新しすぎるのだと思はぬことはない。しかし、世間からして、餘りにもふる過ぎるのだと言はれることを、それほど氣にしてもゐないのである。

『民族の爲め』が一切の事物の價値を決定するのだとは、流石にもう大多數の一般群衆も信じなくなつてゐる。

しかし乍ら、より新しき標準としての、理想としての『人類の爲め』が、これまでの『民族の爲め』なぞに比して、ただ僅かに一歩を進めたものに過ぎないことは、今日果してどれだけの人々から氣附かれてゐるだらうか？

私は決して厭人主義者ではない。のみならず、大體に於ては、何物にもまして人類を愛しても居り、又愛さなければならぬと思つても居る。

それにもかかはらず、人類の悉くを皆、一樣に愛することが出來ない。そして出來ないのを不自然だと思はない。なぜと云つて、その或るものに對しては、非常に自分に近く、自分の同類であると感ずるけれど、他のものに對しては、それほど自分に近く、自分の同類であると感ずることが出來ないからである。

更に又、私達が人類の中の或るものより、ずつと好きな、ずつと愛すべき生物を、人類以外に見出すといふのは、實際に於てあまりめづらしくないところの私達の經驗である。

例へば一方には、僞善者のほかなる何者でもないやうな宗教家、教育家なぞ、及び僞善者たることの必要からさへ解放されて來てゐる、鐵面皮を第一の武器にしてゐる、或は政治家と稱する、或は實業家と稱する紳士的無賴漢、無賴漢的紳士などを――

他方には私達の掌の上から穀物を食べる足の紅い鳩、尾を振り乍ら私達のあとについて來る小狗、青々と浪打つてゐる麥の上を、ほがらかに歌ひ乍ら舞ひ乍ら雲雀、いな、青々と浪打つてゐる麥その物、その隣に一面の菜の花、蝶々、それよりも可愛い、勤勉な勞働者の蜜蜂、蟻なぞを――

これらの二種類のものを對照して見る時、どちらが私達の心にまでより近く、より親しいものであるか？　どちらがより多く『異邦人』として感じられ、どちらがより多く『同類』として、同じ血の、同じ神經の通つてゐる生きものとして、同じ悲しみをかなしみ、同じ悅びをよろこぶ友達同士として意識されるか？

人類の中にも、あれほど厭はしき生物があり、人類のほかにもあれほど愛すべき生物があるとしたら、人類といふ同種屬感情、同類意識はもはや、それほど重要視さるべきものではない。

人類なるが故に、人類ならざるが故に、一方がつねに他方を犧牲にしていいと云ふのは、さうした意味をまでこめての『人類の爲め』は、もはや私達の感情と理性とのいづれからも承認

されないところのものである。

餘りに重すぎる荷車につながれて、夏の日盛りなぞに、嶮しい坂道の中程に立ちすくんでゐる駄馬を見たまへ。彼は私達と同じ汗を流し、同じ太息をつき、また時としては全く同じやうに泣いてゐるではないか？

私はあの馬方をも愛すべき漢であると思ふ。しかし、彼より以上に苦しんでゐる故に、駄馬は一層賢く、一層人間らしくさへ見えるではないか？　否、一層賢く、一層人間らしくさへ見える故に私達は折々あの馬方を幾分憎むべき男のやうにさへ思ふではないか？

諸君は、諸君の一寸した好奇心から、或は全くの偶然なる機會から、その手の中に小鳥を握つて見たことはないか？

その時、可憐なる彼女は、その小さな體全體が心臓ででもあつたかの如く、本當に命懸けな動悸を打たせながら、諸君及び諸君の姉妹等の有つてゐるのと丁度同じぬくもりを諸君の掌に感じさせなかつたか？

そして諸君はまた、次ぎのやうに口の中で言ひながら、再び彼女を自由にしてやらなかつたか？

『何も心配することはありませんよ、お孃さん！　貴女のやうな可愛い人に對して、誰が害を加へるでせう！』

神が人類を幸福に生きさせる爲めに、人類以外の總ての生物を造つたといふ、蟲のいい傳説を信じてゐる歐羅巴人等も、動物愛護を言はないではない。しかし彼等のそれを言ふ理由はかうである――

特に子供等が動物を虐待したり、動物の虐待されるのを見たりすることは、彼等の心情を荒々しく、むごたらしいものにする。そして其結果は、互に愛し合つて行かねばならぬ人間の道徳的向上に障害とならざるを得ないといふのである。

依然として、これは『人類の爲め』ではないか？　人類以外のすべての生物を手段とする、人類中心の考へではないか？

神が人類を幸福に生きさせる爲めに、人類以外の總ての生物を造つたといふ傳説に、數十世紀の間を養はれて來た歐羅巴人と、幸にして今尙ほ輪廻觀念の全くなくならないでゐる私達東洋人とを、此場合同一に考へることは許されない。

私は佛教に説くところの如く（或はそれ以上に耆那教に説くところの如く）、輪廻をその儘に信じてもいいやうな心持にさへなつてゐるのだが、それは此場合の問題にすることを控へよう。

ともあれ、總ての生物は生物として平等にその生命を愛惜されなければならぬ。なぜと云つて、それらの生命は悉く皆、一つの大きな生命につながつてゐるのだから。その一つの大きな生命の部分部分に過ぎないのだから。否、生命はただ一つしかないのだから。本當の生命は一つとも一つ以上とも數へることの、單に『生命』といふよりほかに言ひやうのないものだから。

無數の、より小さな生命から構成されてゐるといふ意味に於て、その内にある一切の物が生きてゐるといふ意味に於て、最後に全體として、最も大なる、恐らくは永久的なる生物であるといふ意味に於て、この宇宙は明白に生命である、生命の生命である。

生命としての宇宙は、殆んど死の如く、無限

に深い眠りの底から、次第次第に淺い眠りの方へ浮び上り、ともかくも現在の處までやつて來た。夢うつゝの間にあるとも、半ば目ざめてゐるとも、云へば云へるであらう。そしてこれからも愈々はつきりした覺醒の方へ浮んで行き、つひには神の如き、無限に明るい意識情態にまで到達することであらう。

宇宙は、『生命』その物は、全體としての生物は、間斷なく、限りなく進化して行く。そこには單なる小部分としての退化だけがある。より多く進化せんが爲めの、より少き退化があるに過ぎない。

しかし乍ら、無限から無限への生命の大きな流に、特に或る區域をかぎつて見るならば、その經過はつねに必ずしも進化的であるとも限らないであらう。

例へば今、所謂原始動物（私共は、原始と云ふ言葉をあんな場合に用ひたくないやうにも思ふのだが）アメエバから人類までの經過が、大體に於て進化の歴史であるといふことは承認してもよい。

しかし乍ら、人類が一たび人類になり得てから今日までの經過は、大體に於てすらも、果して進化であつたか？　それとも退化であつたか？

少くとも、有史以來に範圍を限つて云へば、人類が單により複雜な、より手の込んだ生き方をするやうになつたといふだけでなく、道徳的にも美的にも、本當により立派なものの方へ、だんだんと進化して來たのであるか、それとも反對であるかは問題である。さうだ、如何に控へ目に云つても問題である。

あとからあとから發掘され、發見される古代の諸事物を見る度毎に、古代人がその中から少數の巨人的天才（後代に至つてはそれに似通つたものをさへ見られないやうな）を産出したばかりでなく、彼等全體としてまた實にすばらしい生活と仕事とをしてゐるのに、つくづく私達は感歎し敬服する。

進化か退化かの問題を具體化する爲めには、人類が上前をはねること、利子を取ることを考え、器械といふものを發明したことを考へて見るのは必要な事だ。

特に、人類自身がその手足の延長のつもりで作り出した器械といふ怪物――あの怪物がさかしまに、その手足の延長として人類を使役してゐる近代人の憫笑すべき『文明』『生活の有難味を、冷靜に分析して見るのは必要なことだ。

幾十倍幾百倍の生産力を加へながら、人類の大多數は住むに家がなく、まとふに衣服がなく、食ふにパンすらもない。しかもその不可思議なる生産力の正體をつきとめて見ようともせず、その正體が如何なる吸血鬼であるかを突きとめても、偖てそれをどうすることも出來ないやうに、愚鈍な懦弱な、これでも人類の子孫かと懐かれるやうな現代の人類を考へて見るがよい。

そして、人類は決して進化をやめてゐないし、退化への、頽敗への、破滅への道を急いではゐないと、嗚呼、果して誰が言ひ得るか？

いつその事、一息に破滅してしまへと、私の口は極度の興奮にふるへながら、反語的にはげしく絶叫するかも分らない。

然し、私自身も其一人として、心の底の奥底に、どうして人類の絶滅を痛快がることがあらうぞ！

それにしても明白に下り坂に向つてゐる人類が、再びその勢を盛りかへして來ることが出來るや否や、今ひとたび進化的の經過を取るや

らになり得るや否や、それはただ神だけが知つてゐる。然り、『人類の爲め』に人類以外の總ての生物を造つたエホバ神よりほかなる、何等かの新しき神だけが知つてゐる。

ともあれ、人類の絶滅は、全體としての生物の運命にとつて、生命その物の大きな流にとつて、それほどの問題ではないかも知れない。寧ろ、全く何でもないほどの小事件かも知れない。そして人類よりも一層人類らしき、より高級な、すばらしく立派な種屬が、直に、または適當な時期に於て、補充的に造り出されるかも知れない。

人類の絶滅が直に宇宙の解體でもあるかのやうに、或は宇宙の存在を無意義にするものででもあるかのやうに考へ、またそれ故に、さう易々とそんな事があつてはたまらないと云ふ風に考へるのは、全く救ふべからざる人類の蟲のよき加減である！

（一九二四年三月）

◇

文學史とはそもそも何であるか。曰く『文壇』の歴史にほかならない。『文壇』の表面にまで浮動して來たところの作家及び作品の記述であり、乃至それらの物を通して推斷されたところの一般的風潮の記述である。

文壇とはそもそも何であるか。文藝上の作品の賣られたり買はれたりしてゐるところの『市場』の謂ひである。賣る者はもとよりつねに文藝家もしくは其代辯者であるが、買ふ者は時に少數の宮廷人貴族富豪等、もしくは其代辯者であり、時に多數の民衆もしくは其代辯者である。その賣買に用ひられるところの貨幣が如何なる種類の物であるかは此場合の問題ではない。

ともあれ、文壇は文藝の市場であつて生産地でない。されば、どんなに立派な、賣れ行きのよささうな作品であつても、其作者にして賣ることを欲しないならば、その作品はつひに文壇に現れないでしまふ。たとひ賣ることを拒まないにしても、作者にして若し彼自ら市場へ運び出すことの煩はしさに堪へないならば、且つ彼に代つてその勞をとるところの者がないならば、其作品もまたつひに文壇に現れないでしまふ。たとひ作者が市場へ運び出すことの煩はしさに堪へようとも、或は彼に代つて其勞をとるところの者があらうとも、尚ほ且つ生産地から文壇への距りが餘りに遠く、交通の不便が餘りに甚だしきにすぎて、結局運送の不可能である場合には、其作品もまたつひに文壇に現れないでしまふのである。加ふるに、文藝市場に於ける取引は、十分に合理的なものでなく、賣れなくともよい位の作品が大に賣れ、賣れなければならない位の作品が少しも賣れなかつたり、或はつまらない作品が法外に高く買はれ、立派な作品が馬鹿馬鹿しい安値にしか買はれなかつたりする。そして市場の、文壇の記錄に著しく大きく殘るのは、一に大に賣れた作品と、高く買はれた作品とばかりである。

乃ち、過去の優秀なる文藝家及び其事業が、悉く皆文學史上に記錄されてゐるかのやうに考へたり、少くとも最も天才者的な文藝家等の名前が、文學史の内に網羅されてゐるかのやうに考へたりするのは、私達の望遠鏡の屆かない處に如何に數多くの、如何に大なる天體でもがあり得ることを思はないほどの、眞に驚くべき愚かしさである。

（『文藝家と文壇家』より）